

母 乳 性 黄 疸

—入院治療を要する症例について—

(分担研究：新生児・乳児の在宅療法と生活管理をめぐる保健指導に関する研究)

研究協力者 安次嶺 馨

要 約：高度の遷延性黄疸のため、日齢7以上でNICUに入院・精査・治療を行なう例は1年間に1人弱であった。遷延性黄疸をきたす児の中には早期新生児期に高ビリルビン血症のため光線療法を行なう例が多い。治療は母乳中止や光線療法によく反応する。

見出し語：母乳性黄疸

研究目的：母乳性黄疸は良性で、特別な対策は必要ないと一般に考えられている。しかし母乳性黄疸のため外来へ受診し、保健指導を求める場合も少なくない。特に、ある一定以上の高ビリルビン血症をきたした例では、入院して検査・治療を必要とする。今回は、いったん新生児室から退院した後、遷延性黄疸のためNICUに再入院した例を検討した。

対象・方法：当院NICUに1980年1月より1990年12月の11年間に入院した児のうち日齢7以上で入院した母乳性黄疸の児について、入院時ビリルビン、在胎週数、出生体重、光線療法、栄養法の選択などについて調査した。

結 果：11年間に当院でNICUに入院した新生児は3,500人である。そのうち日齢7以上で入院した遷延性母乳性黄疸は9例のみであった。症

例の臨床像を表に示した。在胎週数は30~41週で、4例は早産期である。出生体重は1678~3526gで4例は低出生体重児である。入院時日齢は8~39で1例を除き14日以上である。入院時の血清総ビリルビン値は16.3~23.0mg/dlで、6例は20mg/dl以上を示した。治療は光線療法のみ3例、母乳中止のみ2例、光線療法と母乳中止を行ったもの4例であり、いずれもビリルビン値を低下させるのに有効であった。また早期新生児期に高ビリルビン血症をきたし、光線療法を行ったものは7例あった。

考 察：母乳性黄疸のため外来を訪れる新生児は日常しばしばみられる。その多くは外来で経過観察をすることができる。しかし中には高度の黄疸のため、入院精査の上、光線療法を要する例がある。当院でretrospectiveに調査したところ、11年間に9例が母乳性黄疸のために入院

していた。入院後、母乳中止のみで改善した例がある。これは外来で注意深く観察できた可能性もある。どのレベルの血清ビリルビン値で入院させるかは在胎週数出生体重によっても異なると思うが、的確な指針がない。しかし血清総ビリルビン値が20mg/dlを越えた場合は、入院

して観察した方が安全であろう。また遷延母乳性黄疸9例中7例が生後早期に高ビリルビン血症をおこし、光線療法を受けていることは興味深い点である。早期高ビリルビン血症は、遷延性高ビリルビン血症と何らかの関係があり、退院時にこの点を指導する必要がある。

入院を要した母乳栄養児の遷延性高ビリルビン血症

症 例	在胎週数	出生体重 (g)	入 院 時 日 齢	入 院 時 ビリルビン (mg)	治 療		早期高ビ血症
					母乳中止	光線療法	
S.N	30	1678	33	18.0	-	+	-
K.H	34	1942	28	21.4	+	+	+
T.R	35	2366	19	23.0	+	+	+
N.Y	36	2418	16	21.7	-	+	+
T.T	38	2550	8	19.4	-	+	-
N.M	38	3135	16	22.4	+	+	+
H.T	38	3140	28	21.8	+	+	+
M.S	39	3190	39	23.0	+	-	+
O.Y	41	3526	14	16.3	+	-	+

(OCH 1980 - 1990)



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:高度の遷延性黄疸のため、日齢7以上でNICUに入院・精査・治療を行なう例は1年間に1人弱であった。遷延性黄疸をきたす児の中には早期新生児期に高ビリルビン血症のため光線療法を行なう例が多い。治療は母乳中止や光線療法によく反応する。